

ウラナミジャノメの産卵行動の観察

久保 弘幸¹⁾

はじめに

兵庫県下におけるウラナミジャノメ *Ypthima multistriata nipponica* Murayama, 1969 の食草については、わずか1例の観察報告(近藤伸一, 1989)しかなく、野外での食草については不明な点が多い。また、産卵行動については、管見の限り報告がない。筆者は、2009年6月24日に加古川市内で本種の産卵行動を複数回観察する機会を得たので、報告しておきたい。なお、今回の観察地はヒメヒカゲの生息地でもあり、近年、同種に対する採集圧がとみに高まっていることを考慮して、詳細な地名や地図については割愛させていただく。本来、こうしたことは学術的報告にありうべからざることであり、このような配慮が、早く不要になることを念じてやまない。

観察状況

観察場所は、東播磨によく見られる低い山地の裾部で、東～南東に向けた緩斜面である。付近は、草地の間にササや灌木が茂り、それを縫って一人が通れる程度の山道がつけられている。この道に面して、高さ50~60cmのネザサ・コシダなどが茂っている。

当日の天候は晴れで、風は弱かった。観察時間帯は、午後2時過~3時頃である。

当日、同地へ赴いたのはまったく別の目的であり、ウラナミジャノメの産卵は、偶然、遭遇して観察したものである。このため時計や巻尺などを所持しておらず、撮影データに記録された時刻はわかるが、個別の行動にかかった時間の記述については、筆者の「体感時間」であり、高さ等の数値も目測であることをあらかじめお断りしておく。

【第1地点】

里道沿いに歩行中、突然、足下からウラナミジャノメ1♀が飛び出す。破損はひどくないが、かなり飛び古した個体。以下、Aと呼称する。

① Aは、南北に延びる里道の西側に沿って生えるササの葉上にとまる。



第1地点 中央下付近が最初の産卵場所。中央のコシダの葉に静止した後、産卵場所へ潜る。右に見えるコシダの枯葉が2卵目の産卵場所。



第1地点 コシダの葉に産み付けられた卵(矢印)。

- ② Aは次いでコシダにとまり、しばし静止した後、葉の縁まで歩いて、下方に茂った草の間に、はねるようにぴよんと飛び降りる。
- ③ さらに葉や茎を伝い、歩いて下方へ移動する。この間、翅は開閉を繰り返す。
- ④ 地表から15cmよりも低い位置で、ササの枯葉または枯茎に1卵を産む。やや遠目ではあるが卵も確認したが、その後見失った。産卵する瞬間は、翅を閉じて静止する。
- ⑤ 産卵終了後、葉、茎を歩いて登り、地上30cmほどの位置で、シダの枯葉下面に1卵を産む。この1卵

¹⁾ Hiroyuki KUBO 兵庫県明石市 兵庫ウスイロヒョウモンモドキを守る会

を採集.

- ⑥その後は歩いて草むらの表面に達し、生息地の斜面上方へ飛び去る.
- ⑦この間の所要時間は5分以内と思われる.

【第2地点】

丈の低い草が広がる中にある、高さ1m強のブッシュの北側で、第1地点とは別個体の♀を発見する。しばし目視していると、産卵の気配を見せたため、観察を開始。以下Bと呼称する。

- ①Bは、ブッシュ北側下部に茂る、スゲ類（カヤツリグサ科 sp.）の葉にとまる。この時の高さは地表30cm程度.
- ②ここからBは、2~3度跳ねるように飛び降りて、下方に茂るスゲ類の枯葉にとまり、そのまま細い枯葉上を歩いて、さらに下方へと移動する。この間、翅を開閉させている.
- ③Bは、枯葉が重なって、観察者からは直接体が見えない場所まで移動した後、しばし翅の開閉を停止した。産卵を邪魔しないよう、直接目視はしていないが、この際に産卵した可能性が高い.
- ④静止位置からすると、産卵は、地表10cmかそれ以下の高さと思われた.
- ⑤その後Bは、スゲ類の葉を歩いて株の表面まで登る.
- ⑥ただちに飛んで、近くのネザサにとまる.
- ⑦ここで卵を探したが、発見できず。Bを見失わないようにするため、卵の探索は早々に打ち切る.
- ⑧この間の所要時間は、2~3分程度.

【第3地点】

- ①Bを追跡したところ、数回飛翔して、第2地点から10mほど斜面奥にある、高さ1mほどのアカマツ幼木の、北側裾に生えるネザサにとまる.
- ②数秒静止した後、ネザサの葉上を縁まで歩き、そこから跳ねるように飛び降りる.
- ③その後、草の葉上を歩いて、葉の下へと潜る.
- ④翅を開閉させて歩きながら、腹端を曲げる動作をする.
- ⑤そのまま10数cm歩いた後、スゲ類（第2地点と同一种）の枯葉に、1卵を産む。地上からは10cm程度か、産卵の瞬間は、数秒間、翅を閉じて静止する.
- ⑥ここからさらに歩いて、スゲ類枯葉の先端に達し、その先にある別の細い枯茎につかまって腹端を曲げようとするがうまくゆかない.
- ⑦そこで産卵行動を中断して、さらに歩き、下方へ移動して、スゲ類幼苗（種不詳）の生葉につかまり、1卵を産む。地上からは5cm以下。産卵の瞬間は、やはり数秒間静止.
- ⑧その後は歩いて葉に登り、株の表面に達した後、飛び



第3地点 アカマツの幼木の根元付近の陰になっている部分が産卵場所.



第3地点 アカマツの幼木根元のスゲ類生葉に産卵された卵（矢印）。このスゲ類は幼苗で、根元から葉先までの高さは4センチ程度。産卵位置は地上数センチ程度であった。

去る。この2卵を採集.

- ⑨この間の所要時間は、5分以内.

まとめ

今回の観察は、偶然の機会であったため、高さや時間の計測道具を所持しておらず、記録としての正確性は高くないが、全般的な印象を以下に記す.

- (1) 産卵場所として選択された場所は、ササ藪の側面、幼木の北面など、いずれも、当該時間帯には日陰になっている部分であった。同所に生息するヒメヒカゲの場合、産卵場所として特に日陰を選択しているようには思われないので（2008年の筆者観察による）、日当たりの悪い部分を産卵場所を選択することが、本種の特徴であるのかもしれない.
- (2) ヒメヒカゲの場合、産卵の際に、やはり草地の表面から下方へ潜る場合があるが、常に草地へ深く潜るわけではなく、むしろ蝶の姿が見えないほど潜ることの方が稀である（2008年の筆者観察）。ウラナミジャノメの場合は、今回、すべての事例において、かなり深く潜っており、時には蝶の姿を目視することも困難であった。また産卵位置も、ウラナミジャ

ノメの方がより低いように思われる.

- (3) 以上のような点から, ウラナミジャノメは産卵場所として, ヒメヒカゲよりも日陰および低い位置を好むものと推察する.
- (4) 今回の観察では, 枯葉に産卵した例が 3, 生葉が 1, 不明 1 であった. ウラナミジャノメの場合も, ヒメヒカゲ同様, 枯葉上への産卵が優勢で, 幼虫は孵化後に自身で食草を選択するものと思われる. 唯一, 生葉への産卵は, スゲ類の幼苗であったことから, 観察地では, スゲ類がウラナミジャノメの食草になっている可能性があるだろう. ヒメヒカゲと食草が重複している可能性は高いように思われるが, 両種が食草選択でどのような棲み分けをおこなっているのか興味深い.

以上, きわめて不十分な観察記録であるが, 今後も生息地における観察を継続し, 産卵行動のあり方や食草について明らかにしたい. なお, 小稿を草するにあたり, 近藤伸一氏より数々のご教示を得た. 文末ではあるが, 記して謝意を表したい.

参考文献

近藤伸一, 1989. ウラナミジャノメの幼虫をメリケンカルカヤから発見. ひろおび, No. 8:9.